

草紅葉

永井荷風

青空文庫



東葛飾ひがしかつしかの草深いあたりに仮住かりずまいしてから、風のたよりに時折東京の事を耳にすることもあるようになった。

わたくしの知っていた人たちの中で兵火のために命を失ったものは大抵浅草の町中に住み公園の興行ものに関たずさわ与わっていた人ばかりである。

大正十二年の震災にも焼けなかった観世音かんぜおんの御堂みどうさえこの度はわけもなく灰になってしまったほどであるから、火勢の猛烈であつたことは、三月九日の夜は同じでも、わたくしの家の焼けた山の手の麻布あたりとは比較にならなかつたものらしい。その夜わたくしは、前々から諦めはつけていた事でもあり、随分悠然として自分の家と蔵書の焼うけ失うせるのを見定めてから、なお夜の明け放れるまで近隣の人たちと共に話をしていたくらいで、眉も焦さず焼けど一ツせずに済んだ。言わば余裕すこぶ頗しやくる綽しやく々としたそういう幸福な遭難者には、浅草で死んだ人たちの最期さいごは話して聞かされても、はつきり会得えとくすることができない位である。しかし事実は事実として受取らなければならぬ。その夜を限りその姿すがた

形^{かたち}が、生残った人たちの目から消え去ったまま、一年あまりの月日が過ぎても、二度と現れて来ないとなれば、その人たちの最早やこの世にいないことだけは確だと思わなければなるまい。

その頃、幾年となく、黒衣^{くろご}の帯に金槌^{かなづち}をさし、オペラ館の舞台に背景の飾附をしていた年の頃は五十前後の親方がいた。眼の細い、身丈^{せい}の低くからぬ、丈夫そうな爺さんであった。浅草という土地がら、大道具という職業がらには似もつかず、物事が手荒でなく、口のききようも至極穩かであったので、舞台の仕事がすんで、黒い仕事着を洗い好みの着物に着かえ、夏は鼠色の半コート、冬は角袖^{かくそで}茶色のコートを襲^{かき}ねたりすると、実直な商人としか見えなかった。大分禿^つげ上った頭には帽子^{ぼうし}を冠^{かぶ}らず、下駄^{げた}はいつも鼻緒^{はなお}のゆるんでいないらしいのを突掛^つけたのは、江戸ッ子特有の嗜^{たし}みであろう。仲間の職人より先に一人すたすと千束町^{せんぞくまち}の住家へ歸つて行く。その様子合^{ようすあい}から酒も飲まなかつたらしい。

この爺さんには娘が二人いた。妹の方は家^{うち}で母親と共に好み焼^{あきな}を商い、姉の方はその頃年はもう二十二、三。芸名を栄子^{おせい}といつて、毎日父の飾りつける道具の前で、幾年間大勢^{おせい}と一緒に揃つて踊つていた踊子の中の一人であつた。

わたくしが栄子と心^{こころ}易^{やす}くなつたのは、昭和十三年の夏、作曲家S氏と共に、この劇

場の演芸にたずさわった時からであった。初日の幕のあこうとする刻限、楽屋に行くとき、その日は三社権現御祭礼の当日だったそう、栄子はわたくしが二階の踊子部屋へ入るのを待ち、風呂敷に包んで持ってきた強飯を竹の皮のまま、わたくしの前にひろげて、家のおつかさんが先生に上げてくれましたといいましたとの事であった。

舞台の稽古が前の夜に済んで、初日にはわたくしの来ることが前々から知れていたからでもあろう。母親は日頃娘がひきになるその返礼という心持ばかりでなく、むかしからの習慣で、お祭の景気とその喜びとを他所から来る人にも頒ちたいというような下町氣質を見せたのであろう。日頃何につけても、時代と人情との変遷について感動しやすい

わたくしには、母親のこの厚意が何とも言えない嬉しさを覚えさせた。竹の皮を別にして包んだ蓮根の煮附と、刻み鰯とに、少々甘すぎるほど砂糖の入られていたのも、わたくしには下町育ちの人の好む味いのように思われて、一層うれしい心持がしたのである。

わたくしはジャズ模倣の踊をする踊子の楽屋で、三社祭の強飯の馳走に与かうとは、全くその時まで夢にも予想していなかったのだ。

踊子の栄子と大道具の頭の家族が住んでいた家は、商店の賑かにつづいた、いつも昼夜の別なくレコードの流行歌が騒々しく聞える千束町を真直に北へ行き、横町の端れに忽

然^{つげん} 吉原遊廓の家と灯とが鼻先に見えるあたりの路地裏にあった。或晩舞台で稽古に夜をふかしての帰り道、わたくしは何か口ざむしい気がして、夜半過ぎまで起きている食物屋を栄子にきいた事があつた。栄子は近所に住んでいる踊子仲間の二、三人をもさそつてくられて、わたくしを吉原の角^{すみちよう}町、稲本屋の向側の路地にある「すみれ」という茶漬飯屋まで案内してくれたことがあつた。水道尻の方から寝静つた廓^{くるわ}へ入つたので、角町へ曲るまでに仲^{なか}の町^{ちよう}を歩みすぎた時、引手茶屋^{ひきてぢやや}のくぐり戸から出て来た二人の芸者とすれちがいになった。芸者の一人と踊子の栄子とは互に顔を見て軽く目で会^え釈^{しゃく}をしたなり行きすぎた。その様子が双方とも何となく気まわりが悪いというように、また話がしたいが何か遠慮することがあるとでもいうように見受けられた。角町の角をまがりかけた時、芸者の事をきくと、栄子は富士前小学校の同級生で、引手茶屋何々^や家の娘だと答えたが、その言葉の中に栄子は芸者を芸者衆^{しゆ}といい、踊子の自分よりも芸者衆の方が一だん女としての地位が上であるような言方をした。これに依つて、わたくしは栄子が遊廓に接近した陋巷^{ろうこう}に生れ育つた事を知り、また廓内の女たちがその周囲のものから一種の尊敬を以て見られていた江戸時代からの古い伝統が、昭和十三、四年のその日までまだ滅びずに残っていた事を確めた。意外の発見である。殆ど思議すべからざる事実^{じじつ}に逢着し得たのである。しかしこ

の伝統もまた三月九日の夜を名残りとして今は全く湮滅してしまったのであろう。

○

この夜吉原の深夜に見聞いた事の中には、今なお忘れ得ぬものが少くなかった。

すみれという店は土間を間にしてその左右に畳が敷いてあるので、坐れもすれば腰をかけたままでも飲み食いができるようにしてあった。栄子たちが志留粉だの雑煮だの饅頭ななどを幾杯となくお代りをしている間に、たしか暖簾の下げてあった入口から這入つて来て、腰をかけて酒肴をいいつけた一人の客があつた。大柄の男で年は五十余りとも見える。頭を綺麗に剃り小紋の羽織に小紋の小袖の裾を端折り、紺地羽二重の股引、白足袋に雪駄をはき、襟の合せ目をゆるやかに、ふくらました懐から大きな紙入の端を見せた着物の着こなし、現代にはもう何処へ行つても容易には見られない風采である。歌舞伎芝居の楽屋などにも、こういう着物の着こなしをするものは、明治の時代の末あたりから既に見られなくなっていた。わたくしは仲の町の芸人にはあまり知合いがないが、察するところ、この土地にはその名を知られた師匠株の幫間であらうと思つた。

この男は見て見ぬように踊子たちの姿と、物食う様子とを、楽し気に見やりながら静かに手酌てじやくさかずきの盃を傾けていた。踊子の洋装と化粧の仕方を見ても、更に嫌悪を催す様子もなく、かえって老年のわたくしがいつも感じているような興味を、同じように感じているものらしく、それとなくわたくしと顔を見合せるたびたび、微笑を漏したいのを互に強いて耐えるこらような風にも見られるのであった。思うにこの老幫間もわたくしと同じく、時世と風俗との変遷に対して、都会の人の誰もが抱いているような好奇心と哀愁とを、その胸中に秘ひしていたのだろう。

暖簾外の女郎屋は表口の燈火を消しているので、妓夫ぎゆうの声も女の声も、歩み過る客の足音と共に途絶とだえたまま、廓中は寢静しんじやうつてタキシの響も聞えない。引過ひけすぎのこの静けさを幸いといわぬばかり、近く横町で、新内語しんないかたりが何やら語りはじめたのが、幾とし月聞き馴れたものながら、時代を超越してあたりを昔の世に引き戻した。頭を剃ったパツチばきの幫間の態度がいかにその処を得たように見えはじめた。わたくしは旧習に晏如あんじよとしてゐる人たちに対する軽い羨望せんぼう嫉妬しつとをさえ感じないわけには行かなかつた。

三月九日の火は、事によるとこの昔めいた坊主頭の年寄をも、廓と共に灰にしてしまつたかも知れない。

栄子と共にその夜すみれの店で物を食べた踊子の中の一人はほどなく浅草を去って名古屋に、一人は札幌に行った話をきいた。栄子はその後万才なにがしの女房になって、くるわ廓そと外の路地にはいないような噂を耳にした。わたくしは栄子が父母と共にあの世へ行かず、娑婆しゃばに居残っている事を心から祈っている。

大道具の頭かしらの外に、浅草では作曲家S氏とわたくしの作った歌劇『葛飾情話』演奏の際、ピアノをひいていた人も死んだそうである。その家は公園から田原町たわらまちの方へ抜ける狭い横町であつたがためだという話である。観客から鼯鼠ひいきの芸人に贈る薬玉くすだまや花環はなわをつくる造花師いりやが入谷に住んでいた。この人も三月九日の夜に死んだ。初め女房や娘と共に大通りへ逃げたが家の焼けるまでにはまだ間があるうと、取残した荷物を一ツなりとも多く持出そうと立戻つたなり返つて来なかつたという。

浅草公園はいつになったら昔の繁華にかえることができるのであろう。観音堂いんぎやうが一立いちりゅう斎うさい広重ひろしげの名所絵に見るような旧観に復する日は恐くもう来ないのかも知れない。

昭和十二年、わたくしが初めてオペラ館や常盤座ときわざの人たちと心易くなつた時、既に震災前の公園や凌雲閣りょううんかくの事を知っている人は数えるほどしかいなかった。昭和の世の人たちには大正時代の公園はもう忘れられていた。その頃オペラ館の舞台で観客から喝采かつさいせ

られていた人たちの大半は震災後に東京へ出て来て成功した地方の人のみであつた。しかしこの時代も今はまた忽ち^{たちま}にしてむかしとなつたのである。平和の克復したこの後の時代にジャズ模倣の名手として迎えらるべき芸人の花形は朱塗^{しゅぬり}の観音堂を見たことのないものばかりになるのである。時代は水の流れるように断え間なく變つて行く。人はその生命の終らぬ中^{うち}から早く忘れられて行く。その事に思い至れば、生もまたその淋しい事において、甚しく死と變りがないのであろう。

○

オペラ館の楽屋口に久しく風呂番^{ふろばん}をしていた爺さんがいた。三月九日の夜に死んだか、無事であつたか、その後興行町の話が出て、誰一人この風呂番の事を口にするものがない。彼の存在は既に生きている時から誰にも認められていなかったのだ。

その時分、踊子たちの話によると、家もあつた、おかみさんもあつた。家は馬道^{うまみち}辺で二階を人に貸して家賃の足しにしていた。おかみさんはまだ婆さんというほどではなく、案外垢^{あかぬ}抜けのした小柄の女で、上野広小路^{ひろこうじ}にあつた映画館の案内人をしてゐるとの事で

あつた。爺さんはいつでも手拭をうしろはちまき後鉢巻うしろはちまきに結んでいるので、禿はげ頭あたまか白髪頭しらがあたまか、それも楽屋中知るものはない。腰も曲つてはいなかったが、手足は痩せ細り、眼鏡をかけた皺の多い肉の落ちた顔ばかりを見ると、もう六十を越していたようにも思われた。夏冬ともシャツにズボンをはいているばかり。何をしていたものの成れの果やら、知ろうとする人も、聞こうとする人も無論なかったが、さして品のわるい顔立ではなかったので、ごろつきでも遊び人でもなく、案外堅気の商人であつたのかも知れない。

オペラ館の風呂場は楽屋口のすぐ側にあつた。楽屋口には出入する人たちがいつも立たちば談なしをしていた。他の芝居へ出ているものや、地方興行から帰つて来た人たちが、内ものを呼び出して、出入口の戸や壁に倚よりかかつて話をしてる事もあるし、時候が暑くなると舞台で使う腰掛を持出して、夜昼となく大勢交かわる交がわるに腰をかけて、笑い興じていることもあつたが、しかし爺さんがその仲間に入つて話をしてる事は滅多になかった。この腰掛で若い者が踊子と戯れ騒ぐのさえ、爺さんは見馴れているせいか、何が面白いのだと言わぬばかりの顔附で見向きもしなかった。

寒くなると、爺さんは下駄棚のかげになつた狭い通路の壁際で股火またびをしながら居いねむり睡むりをしているので、外からも、内からも、殆ど人の目につかない事さえあつた。

或年花の咲く頃であつたろう。わたくしは爺さんが何処から持つて来たものか、そぎ竹を丹念に細く削つて鳥籠をつくつてゐるのを見たことがあつた。よく見る町の理髪師が水鉢に金魚を飼つたり、提燈屋ちようちんやが箱庭をつくつて店先へ飾つたりするような趣味を、この爺さんも持つていたらしい。爺さんはその言葉遣いや様子合ようすあいから下町に生れ育つたことを知らしていた。それにしても、わたくしは一度もこの爺さんの笑つた顔を見たことがなかつた。人は落魄らくはくして、窮困の中に年をとつて行くと、まず先に笑うことから忘れて行くものかも知れない。

戦争が長びいて、瓦斯ガスもコークスも使えなくなつて、樂屋の風呂が用をなさなくなると、ほどもなく、爺さんは解雇されたと見えて、樂屋口から影の薄い姿を消し、掃除は先の切れた箒ほうきで、新顔の婆さんがするようになった。

○

戦後に逢う二度目の秋も忽ち末近くなつて来た。去年の秋はこれを岡山の西郊に迎え、その尽るのを熱海に送つた。今年下総しもうさかつしか葛飾の田園にわたくしは日ごとごとに烈しくなる風

の響をききつつ光陰の早く去るのに驚いている。岡山にいたのは、その時には長いように思われていたが、実は百日に満たなかった。熱海のこはるびより小春日和は明るい昼の夢のようであった。

一たび家を失つてより、さすらい行く先々の風景は、胸裏に深く思出の種を蒔かずにはいなかった。その地を去る時、いつもわたくしは「きぬぎぬの別れ」に似た悲しみを覚えた。もう一度必ず来て見たいと期待しながら、去つて他の地へ行くのである。しかしながら期待の実行は偶然の機会を待つより外はない。

八幡の町やわたの梨畠に梨は取り尽され、葡萄棚ぶどうだなからは明るく日がさすようになった。玉とうも蜀黍ろこしの茎は倒れて見通す稻田の眺望は軟かに黄ばんで来た。いつの日にか、わたくしは再び妙林寺の松山にとんび鳶の鳴声をきき得るのであらう。今ごろ備中総社の町の人たちは裏山の茸きのこがり狩に、秋晴の日の短きをなげ歎いているにちがいない。三門みかどの町を流れる溝川みぞがわの水も物洗うには、もう冷たくなり過ぎているであらう。

待つ心は日を重ね月を経るに従つて、郷愁に等しき哀愁をかも醸す。郷愁ほど情緒の美しきものはない。長くわたくしが巴里パリの空を忘れ得ぬのもこの情緒のなすところであらう。

巴里は再度兵乱に遭つたが依然として恙なく存在している。春ともなればリラの花も薫かお

るであろう。しかしわが東京、わが生れた孤島の都市は全く滅びて灰となった。郷愁は在^あるものを思慕する情をいうのである。再び見るべからざるものを見ようとする心は、これを名づけてそも何と云うべき歟^か。

昭和廿一年十月草

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〇五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

草紅葉

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>